



◆近代短歌の巨人たち

小池 光
Hikaru Koike

斎藤茂吉 (1)

歌人中の歌人

斎藤茂吉は明治十五（一八八二）年五月十四日現在の山形県上市市金瓶かねびんに生まれた。農家の三男である。貧しい農家ではなく、裕福な部類に属する。父熊次郎は小男で敏捷、活発、活動的、なにごとにも熱中してこだわる人。母いくは大柄で無口、唄一つ歌えない芒洋とした受動の人。いずれも茂吉の性格に伺い知れる。

子供のとき絵が巧みで、字も上手だった。しかし普通の子供であって十分にわるさもし、戦いくさごっこなどにも熱中した。学校の成績はずうっと首席だったが、目が覚めるような秀才という雰囲気はなく、なぜか茂吉はふしぎと勉強はできるのだなという印象であった。

上山尋常高等小学校高等科を卒業して絵かきにな

ろうか寺の坊主になろうか、それともこのまま百姓になつてしまおうかなどと思ひながらブラブラしていると、地元出身で遠縁に当たる医師斎藤紀一がこの少年をおもしろく思い、東京に連れていって学校を続けさせてくれることになった。斎藤紀一はただの医者でなく実業家、病院経営者で、浅草で大きな病院を経営し、すでに成功していた。

人の一生は、偶然の産物であるが、このとき斎藤紀一に見い出されていなかったなら近代随一のこの歌人は誕生しなかったに違いない。後に斎藤家の養子になって長女輝子と夫婦になる。それまでは守谷茂吉である。

駿河台下にあった開成中学に編入する。成績は、よい。しかし、田舎言葉丸だしである。風采はおよそ都会的でない。空中に指で書を書いて悦に入る癖がある。



幼年時代。実父熊次郎と。

やたらクチビルをべろりべろりと嘗める。ついた渾名がペロリである。およそクラスメートからリスベクトされていたとは思われぬ。しかし茂吉は格別のコンプレックスを感じたり、田舎者である自分を克服しようとして足掻いたりはしなかったようだ。芒洋と超然としてゐる。母譲りであろう。相当風変わりである。

一年浪人して第一高等学校に入學した。ものすごくまじめでものすごく勉強する。それで成績はマアマアの部類である。言動風貌は相変わらず夫子然としてゐる。早熟で、目から鼻に抜ける秀才で、自信満々の生意気タイプ、つまり石川啄木の青年の対極にある。まして文学や芸術へのセンスや関心などおよそ身辺から漂わない。後年同級生が会合したとき、最近評判になつてゐる歌人の斎藤茂吉というのはうちのクラスにいた斎藤だろうか、いやそれはなにかの間違ひだ、あの斎藤が歌などヒネるわけがないという話になつたそうである。

名だたる文学者の青年時にはだいたい共通の特徴がある。早熟で、学校教育を突き抜けた知識を持ち、感受性際立って鋭敏、ピリピリとして他を寄せ付けず、ゆえに孤独で内省的、また権威に対して反抗的である。眼光は研ぎ澄まされ、顔色は青白い。啄木や芥川はその典型だ。斎藤茂吉は逆である。それが文学者の青春像の中ではひとしきり異彩を放つ。歌人などならうとは周囲の誰も想像もせず茂吉自身も思つてもみなかった。茂吉は自身の本当の姿を周

囲から隠蔽していたのでなくて、自分で自分が何者なのかまだわからなかつた。早熟の反対、きわめてオクテの人である。

二十三歳のとき神田の貸本屋から正岡子規「竹の里歌」を借りて読み熟中して作歌を志す。二十五歳で「馬酔木」に歌を送り、また伊藤左千夫に面会する。「アララギ」の創刊はその翌年。茂吉は東京帝国大学医科大学の学生になつてゐる。茂吉最初の歌集にして近代文学に短歌がその一翼を占めることを天下に示した「赤光」が刊行されたのは大正二（一九一三）年秋のことであつた。この年はまた萩原朔太郎の「月に吠える」が世に出、詩と短歌はともにあたらしい近代の文学として手を携えるように歩き出したのであつた。それでは「赤光」の歌から紹介、鑑賞しよう。

赤茄子の腐れてゐるるところより幾程もなき歩みなりけり

「赤光」

いきなり難解歌であるが、それは赤茄子（トマト）の腐つて放り投げてあつたところから幾程もしない歩みであつた、というのであつて、「それは」の内実がまったく示されていない。いわば主語不在の歌である。腐つた赤茄子への息詰まるような濃厚な意識があり、その意識だけで一首を成さしめた。今日見てもすぐれて前衛的である。こういう短歌は茂吉によつてはじめて出現し、そこに近代文学としての短歌の可能性が開かれてゆく。



東京帝国大学生の頃。

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の
母は死にたまふなり
〔赤光〕

余りに有名な「死にたまふ母」一連の中でも知られた一首である。生母いくは大正二年の五月、五十歳で脳溢血のため亡くなった。農家の戸口は開かれていてツバメが自由に家の中に入ってくる。梁にとまったツバメに見守られるように、その下では母が生涯を終わらんとしている。生も死も、大きな自然の中での出来事である。「死にたまふ母」は母への比類ない挽歌であるとともにまた豊饒かぎりない自然賛歌でもある。現代の死のあり様を思えばまさに隔世の感のあるところである。「死」に「たまふ」という動詞を直結するところも斬新な力技である。

めん雞ら砂あび居たれひつそりと剃刀
研人は過ぎ行きにけり
〔赤光〕

というのも「赤光」を代表する一首。シャープな感覚が研ぎ澄まされた歌で、また茂吉の一面を伝える。ふれ声をあげて町を渡って行く剃刀研ぎの男がそこで一瞬沈黙した。その側に無心にめん鳥たちが砂をつついていて。刃物と、無防備な彼らの喉元と、白昼の亀裂に出現した一種の奥深い危機感をあざやかに切り取った。オスでなくめん鳥である。エロティックなイメージもほのかにかぶってくる。

大学を卒業して巣鴨病院の医局員となった。結婚し子供が生まれる。茂吉が十五歳で上京したとき後の妻輝子は一歳である。少年は赤子をおぶって子守させられることもあった。

三十六歳で長崎医学専門学校（今の長崎大学医学部）教授となつて赴任した。茂吉の長崎時代である。この時期の作は歌集「つゆじも」に収められる。

公園の石の階より長崎の街を見にけりさる
すべりのほな
〔つゆじも〕

スナツブショット風である。知らない街の高台に登ってきた。眼下に長崎の家並みが広がり点々と紅いサルスベリが咲いている。平明でアツサリして、それでいて情景はよく見える。こういう歌境はなにことも濃厚に過剰に蓄えられた「赤光」の世界とは明らかに別の気分である。すつきり風通しがよい。

隣りに間に男女の語らふをあな嫉ましと言ひ
てはならず
〔つゆじも〕

風邪から肺炎になり咯血した。温泉で一人静養するときのもの。当時の温泉宿だから隣室の物音が手に取るように聞こえる。男女がひそひそ親しく話す声が聞こえる。こちらは病後の心細い一人身であれば妬ましいなどと思つてはならないが本当は妬ましく、そこがどこかしらユーモラスである。茂吉の短歌はすばらしく間口が広いがユーモア、愛嬌というのもその間口



長崎時代の茂吉。

の一つの入り口でこういう作にその一端が示されよう。隣室の出来事が気になって気になって仕方がない。そしてまた平然とそれを歌に作る。

長崎時代に続くのはヨーロッパ留学の時代である。大正十(一九二一)年秋から十三年までウィーン大学、ミュンヘン大学で研究生生活を送った。この時期のものは『遠遊』『遍歴』の二歌集である。スナッフシヨット風の歌境はいよいよ顕著になってメモ風、覚書風の短歌が延々とある。短歌日記といってもいいだろう。

体ぢゆうが空になりしごと楽にして途中
靴墨とマツチとを買ふ

〔遍歴〕

滞欧中実父熊次郎が死に、また関東大震災の報道に接した。罹災した親友中村憲吉の家族が無事だったという連絡を受けたときのもの。下句の即事性が短歌日記の典型を示す。心を支配していた心配事が晴れた時、ものはずみに靴墨とかマツチとか買ってしまふ。解放感もたらす人間の行動である。

レオナルドゥにこの二日あまり集注し
われの眼の澄むをおぼゆる

〔遍歴〕

幼い頃から絵をよくした茂吉は絵画に対する眼力にきわめて優れたものがあつた。滞欧中もしきりに

各地の美術館を訪ねてヨーロッパ絵画を見ている。これはルーブルを訪ねたときのもの。レオナルド・ダ・ビンチの前に二日間通い二日間立ち続ける。大仰に言っているのではなく茂吉の性癖を考えるとアリノママであつたろう。凝視に凝視を重ね、ついにわが眼は澄むに至つたのであつた。まさに至福の時であつた。

生涯に一万七千余の歌を詠んだ斎藤茂吉はまた膨大な散文を書いた。特に随筆は名高い。鷗外の文章をよく消化吸収した重厚な文体の中に茂吉というふしぎな人間像が至るところに垣間見え、格調の高さと偏執狂的こだわりが調和共存する景観には独特の魅力がある。その中でも帰国後求められて執筆したいわゆる滞欧随筆の数々はおもしろい。一種の短編小説とも読め、また一種の散文詩とも読める。是非岩波文庫『斎藤茂吉随筆集』を手にとって読まれることをお勧めしたい。

こいけ・ひかる「短歌人」編集人



ヨーロッパ留学中、ゲーテ像の前で。



◆近代短歌の巨人たち

小池 光
Hikaru Kohike

斎藤茂吉 (2)

歌人中の歌人

斎藤茂吉の後半生について作品を引きながら点描する。

大正十四(一九二五)年ヨーロッパ留学から帰国するが、帰途の船中において青山脳病院全焼の電報に接する。茂吉を待っていたのは想像もしない悲劇的現実であった。

かへりこし家にあかつきのちやぶ台に
火焰の香する沢庵を食む 「つゆじも」

自家製の漬物樽が焼け残り、食べば焦げたような味がする、という歌である。焼け残った風呂場に畳を入れて書斎兼応接間とした。間もなく四十五歳の茂吉は青山病院院長となり、翌年には養父紀一が没する。病院の再建と経営はその双肩に委ねられた。困

難にもめげず茂吉は縦横に仕事をし、方々に旅行もし、雄渾な書をなし、文筆に打ち込んで壮年の気力体力が充実している。随筆が注目を集め、歌壇外のファンを獲得した時期でもある。

昭和四(一九二九)年、朝日新聞社の招待で他の二歌人とともに社の飛行機に搭乗し、眼下の東京を見て歌を即詠した。歴史的一場面である。

電信隊浄水池女子大学刑務所射撃場塹壕赤
羽の鉄橋隅田川品川湾 「たかはら」

次々に見えてくるものを列挙しただけの歌。茂吉の歌はきわめて間口が広いがこのような試みもあり、またそれはそれでいかにも大胆、巧みだ。極端に定型を逸脱しながら、舌上に転がして味読すると影のように



昭和4年11月28日、朝日新聞社機に搭乗した折、立川飛行場にて。右より土岐善磨、パイロット、茂吉、前田夕暮、吉植庄亮。

五七七七七が寄り添っているのがわかる。唯一のひらがな「の」の役割が大きい。

五十代の茂吉は名著『柿本人麿』に没頭する。この労作は帝国学士院賞を受けた。芸術院賞でなく学士院賞であることがおもしろい。また、昭和十五（一九四〇）年に歌集『寒雲』『暁紅』、十七年に『白桃』を出す。中期茂吉を代表するものとしてとくに『寒雲』は世評高い。

街道を駆歩する歩兵一隊が横に折れたり その最後の兵

『寒雲』

茂吉は映画愛好家でしきりに映画館に歩を運んだ。ニュース映画を好むところが変わっている。この歌はその映画の一場面のようにでもあり、実景でもあるように判然としないが、いずれにせよ人の見ないところを見るという視線が確かである。即物的ではなはだ無感情だが、「最後の兵」の存在感はまきれない。

バケツより雑巾しほる音ききてそれより 後の五分あまりの夢

『寒雲』

朝方、家政婦のような人がすでに仕事をしている。雑巾しほってるなど思いつつ五分ばかり眠った、という歌。「バケツより」の「より」が実にふしぎな精彩ある働きをしている。茂吉の短歌はいつたいに、さりげない顔をした、ありふれた語にとてつもない強引、斬新な内実を与えるのを特徴とするが、その典型的一

例である。いわゆる「内容」の深刻さ、その軽重においてでなく、こういうばかばかしいまでの些事にこそ言語の捌き手としての力量は露呈するとしたものだ。

昭和八（一九三三年）、茂吉夫人がダンスホールに出入りして遊興する事件が新聞にスキヤンダルとしてすっぱ抜かれた。茂吉は大いに傷心し、離婚も考えるが思い止どまる。以後茂吉夫妻は十二年間別居生活を送る。

またこの時期、茂吉は若き門弟である永井ふさ子と濃密な恋の一時期を過ごした。茂吉はこういふとき大いに世間体を気にするごく小心な世俗の人であり、恋愛の様子は歌集のおもてには見えないようになっていくがそれでもこんな歌には透けてしまうものがある。

ほのぼのと清き眉根も嘆きつつわれに言問 ふとはの言問

『暁紅』

二人で映画を鑑賞中、彼女がなにを囁いたという場面のようなのである。

戦時中の茂吉はここでも一個の世俗の人であり、熱烈に戦う祖国に肩入れした。格別ことさらに国粹的イデオロギーを持っていたわけではない。ありふれた庶民感情である。ただ、その言語感覚は凡人をはるかに越え、加えて粘着的激情的気質は著しいものであったから、発言はいやが応にも目立つものであった。戦後の茂吉はこの責を問われるように沈黙を強いられ、期を一にして老いは深まっていた。

昭和二十（一九四五）年春、郷里に疎開する。疎開後



茂吉と永井ふさ子。

空襲で青山の自宅と病院はふたたび全焼する。終戦を郷里金瓶で迎えた。

翌年、同じ山形県の大石田に移り門弟の別宅に滞在した。肋膜炎を患った。町はずれを流れる最上川を凝視して歌集『白き山』の歌々を詠んだ。『赤光』とともに『もつとも名高い茂吉歌集』である。敗戦の悲傷と、自身の病、そしてそこからのよみがえりを大いなる自然につつまれながら歌い上げる。いかにも名歌名唱らしいたずまいの作が並ぶ。

最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべ となりけるかも

『白き山』

もつとも知られた一首である。川下から川上に風が立ち、川波が常態と違う。それを「逆白波」と造語した。はじまりに漢字を六個連ね、あとは一転してひらがなで通す。いかにも様式的で一幅の日本画を見るようである。色紙などにしばしば書いた。

おしなべて境も見えず雪つもる墓地の一 隅をわが通り居り

『白き山』

しかしこういう歌ではリアリズムを越えた追真感が迫る。まざまざと茂吉その人がいま墓地の一隅を通りつつあるように思われるではないか。ではそのときその人物を凝視する作者はどこにいるか。むろん通り行く人物のこちら側にいる。行動するわれと、凝視するわれがあざやかに分離しそれぞれ独立しないと

こういう表現は得られない。客観写生などということではとても説明できない。茂吉の斬新さは、しばしばこのように平然と「われ」を分化させるところにある。

戒律を守りし尼の命終にあらはれたりしま ほろしあはれ

『白き山』

その一方で微かに絶えず揺籃するのはこのようなエロスの幻影。茂吉は尼が大好きであった。禁忌の中にこそ「まほろし」は研ぎすまされて結晶する。それはまた生そのものの根源にほかならない。あらわれたかも知れないまほろし、あらわれたであろうまほろしというべきところ、一切の推量を排除して「あらはれたりしまほろし」と踏み越える。踏み越えて、断然断定する。茂吉の面目が躍如としている。

帰京は昭和二十二（一九四七）年十一月。茂吉は六十五歳の老の人になっていた。世田谷代田に新しく購入した家に住む。以降の歌は没後「つきかけ」として纏められ、最後の歌集となった。

その「つきかけ」の諸作は緊張感に満ち満ちた「白き山」の歌境とは大いに趣を異にし、自在闊達で人を食ったおもしろい歌が多い。

税務署に届けに行かむ道すがら馬に逢ひた りあ、馬のかほ

『つきかけ』

税務署に確定申告に行く。戦後間もない東京ではまだ馬が荷車を引いている。税金を取られることは万人



昭和21年2月、
山形・大石田の雪の最上川畔に立つ茂吉。

にとつて愉快なことでない。コンチクシヨウと思いつつ歩いてゆくと馬のとほけた馬面さえ不快である。最上川逆白波の名歌と同一者による歌と思われぬ。しかし、ここに潜む期せずした「笑い」こそまた茂吉短歌のエッセンスのひとつなのである。

おもひいづることあり夏のみじか夜に金瓶の蚤大石田の蚤

「つきかげ」

疎開の頃を回想している。老いは深まり、一年二年前のこともはるかな過去のように思われる。ここで「蚤」ではなく「蚤」であったなら、しばしば見るありがちな普通の歌だろう。蚤だから斎藤茂吉の歌になっている。蚤やシラミ、蠅や蚊、またネズミの類と生涯を通して格闘した。格闘というより不倶戴天の敵として戦った。その戦闘精神が普通のわれわれに比していかにも過剰であり、小事にムキになるようなところが、ユーモアの源泉となっている。しみじみとして、しかし微笑せずにはいられない歌。

目のまへの売犬の小さきものどもよ生長ののちは賢くなれよ

「つきかげ」

円柱の下ゆく僧侶まだ若くこれより先きいろいろの事があるらむ

同

そして知られた最晩年のこういう歌には老いのふかぶかした万感の思いがごく平明な口調で吐露され、一種の「名言」の趣を湛えるのである。読者は、時に自ら小さき犬となり、時にうら若き僧侶となつて、またとない暖かな激励を受ける気持ちになるはずだ。

同年宮中歌会始選者。昭和二十三年より朝日歌壇選者。なお十二年から芸術院会員となつている。二十六年文化勲章受章。歌人としての榮譽はすべて受けた。

二十五年暮、新宿区大京町の新居に移る。ここが終の家となつた。昭和二十八（一九五三）年二月二十五日心臓喘息のため逝去。享年七十歳九月。戒名「赤光院仁誉遊阿曉寂清居士」は自ら撰ぶ。墓は青山霊園大久保利通公の真ん前と郷里金瓶村宝泉寺と分骨して二つある。

こいけ ひかる（短歌人二編集人）



昭和26年11月3日、文化勲章受賞の日、左より美智子、恵子、章二、茂吉、てる子、茂一、昌子、後ろは茂太。